

HBS研究部だより



Vol. 19

巻頭言



問われる統合の成果

HBS研究部長 苛原 稔

徳島大学蔵本キャンパスに揃う生命科学の研究組織を統合したHBS研究部が開設されてから9年あまりが経過します。現在、医学、歯学、薬学、栄養、保健系の3学部5教育部を擁し、研究大学としての位置づけを明確にした徳島大学の中核組織として、また、全国的にも類をみない存在感のある生命科学の総合研究拠点として、学内外で認知されています。

このHBS研究部では、大学院生教育や研究で5教育部共同の事業が定期的で開催され、いくつかの横断的な先進研究も行われるようになりました。例えば教育面では、医療教育開発センターを中心に、大学院講義の他教育部への開放、あるいは共同してサマープログラムや小豆島リトリートなどを開催するなど、共通化・共同化事業が行われています。また研究面では、総合研究支援センターを中心に、先端研究に関する大型機器やイメージング機器の整備、実験動物に関する管理や研究方法の研修など、共同して研究環境の整備を図り、研究協力できる体制の構築が進んでいます。

確かに、教育や研究環境整備ではそれなりの成果を出しており、統合の価値はあったと思います。この点に関しては、研究部の教員、職員、学生の皆さんの不断の努力に感謝したいと思います。しかし一方で、少子高齢化の中で大学間競争激化、予算・教員数削減、さらに法人統合化の問題など、現状には難問が山積しているのも事実であり、今の統合のスピードで本当に将来の発展を約束できるのかについては大きな疑問が残るように思います。来年の4月には統合10周年を迎えますが、この時期に、立ち止まって統合の成果がどこにあるのかを点検し、将来への戦略を練る必要があると痛切に思います。

HBS研究部がこれからも発展し続けるためには、国際化と組織改編が不可欠だと思いますが、これらについてはけっして順調には進んでいないと感じています。安倍現政権は明確に国際化を打ち出しており、文部科学省もグローバルに評価される大学を作ることを表明しています。徳島大学が研究大学として国内外で高い評価を得られ続けられるためには、国際的に活躍する先進的でチャレンジ精神に富む研究者を育成し、より高い成果を挙げて行くことが求められていると考えます。しかし、現状の留学生の受け入れや学生・研究者の海外への挑戦状況では十分とは言えません。そのため、遅れている国際化を加速させる必要があります。これは待ったなしです。

もうひとつの課題である組織改編はさらに進んでいないように思います。競争に勝てるHBS研究部へと発展させるためには、時代に即した優秀な研究者を集める必要があります。それには大胆な戦略のもと将来を睨んだ組織改編が必要です。

開設10年を期に我々はHBS研究部の成果を問わねばなりません。そして、HBS研究部が出発の精神に立ち返って、戦略をもって国際化と組織改編を加速させなければなりません。今がその時期であり、次期中期計画期に研究大学として生き残るためには先送りできません。進めて行くではありませんか。もちろん、これには大きな痛みを伴う覚悟をしなければなりません。そのためには皆さんの多大なご支援が必要です。ご協力のほど何卒宜しくお願いします。

目次

巻頭言	p.1
HBS研究部長 苛原 稔	
特集	p.2
藤井節郎記念医科学センターについて	
理事(研究担当) 副学長 野地 澄晴	
「人体解剖と骨のミュージアム」の リニューアルオープンと一般公開 ミュージアム運営責任者 北村 清一郎	p.4
徳島大学大塚講堂リニューアル オープン記念市民講座報告 薬理学分野 玉置 俊晃	p.5
特別寄稿	p.6
新分野紹介	p.7
疾患治療栄養学分野 瀧田 康弘 先端運動障害治療学分野 後藤 恵	
医療教育開発センターニュース	p.8
2013 Retreat 報告	p.9
総合研究支援センターニュース 動物資源研究部門 松本 高広	p.10
研究部ホットニュース AWAサポートセンター長 山内あい子	p.11
第10回 HBS公開シンポジウム開催予告 HBS市民公開講座開催報告	p.12
学会情報	p.12
新任教授ご挨拶	p.13
退職教授一覧	p.13
学会賞等受賞者紹介	p.14
編集後記	p.14

理事（研究担当）・副学長 野地澄晴

徳島大学蔵本キャンパスの中心に、大きな建物が建設された。これが「藤井節郎記念医科学センター」である。このセンターは一般財団法人藤井節郎記念大阪基礎医学研究奨励会からの寄附金により設置された。藤井節郎先生のご略歴について、簡単に紹介しておく。藤井先生は昭和24年に九州帝国大学医学部をご卒業後、九州大学医学部の医化学教室において助手、助教授として研究され、昭和37年に徳島大学医学部酵素生理学部門の教授として赴任された。昭和51年には大阪大学タンパク質研究所機能制御部門の教授として徳島大学から転出されている。昭和59年に大阪大学をご退官後、大塚製薬株式会社・琵琶湖研究所所長として勤務されていた。残念ながら、平成元年8月にご逝去された。

（株）メディカル・プリンシプル社のDOCTOR'S MAGAZINE 2013年05月号および日本経済新聞（2013/1/29）に掲載された齋藤 康千葉大学長の記事から一部引用させていただき、当時の藤井研究室の雰囲気を紹介する。「藤井先生はコレステロールなど脂質の研究の国内の第一人者だった。

（齋藤氏は）大学の近くに住んで研究に没頭。休みは年に1日、研究室全員で繰り出す阿波踊りの日だけだった。実験結果が気になると夜中の2時、3時でも呼び出しの電話がかかる。跳び起きて玄関を出ると、先生が手配した大学行きのタクシーが待っていたこともあった。」（藤井先生は）「命じるだけでなく自分も夜中の2時でも3時でも詰めている。（中略）当時は全国から40人もの“弟子たち”がいたというから、藤井研究室の情熱の大きさと予算規模は圧倒的であった。」「藤井先生の口癖は「10倍」。一流の研究者になりたいなら、他人の10倍実験して、結果も10倍厳しく吟味する。「10倍の哲学」は先生の研究姿勢そのものだった。指導は厳しかったが研究は楽しかった。」1975年、齋藤氏は千葉大学へ異動されるが、その時に藤井先生が齋藤氏に送った言葉は、「これからお前は人の上に立って若い者を指導していく。そのとき心に留めておく言葉を送ろう。それは“降るような愛を注ぐ”だ。雪が降る日に天に向かってみると、雪が顔にあたって雪が溶ける。溶けても溶けても愛を注ぐように雪は降り注ぐんだと。その気持ちを忘れずに若い者を大切に、仕事をせいと」であった。齋藤氏が開発していた高脂血症治療と動脈硬化予防の薬品リパロについて、食道がんで病床に就いていた藤井先生に相談した時の言葉は、「オマエの言う通りの意味がありそうだ。ただ

し、特許を取るとか考えずに、純粹に患者さんに役に立つ薬を作るのに徹しきれぬなら、やりなさい」であった。この言葉に励まされて、齋藤氏は、現在世界中で販売されている悪玉コレステロールを低下させる薬を開発することに成功する。

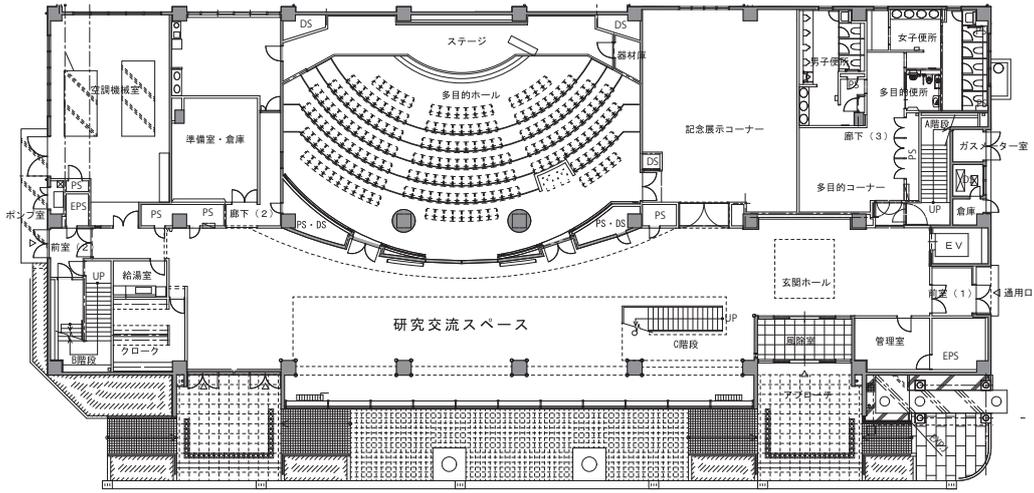
藤井先生はハードな研究から制がん剤のフトラフルの作用機序の解明、UFTの発明、タンパク質分解酵素阻害剤ノイエル、FOY、フオイパン、フサンなどの発明と薬の開発、高脂血症剤プラバスタチンの発明などに関与し、多くの業績を上げておられる。こうして開発された薬の特許ライセンス料の一部がこのたび徳島大学に寄附された。

藤井記念医科学センターの設立理念・目的は次のとおりである。

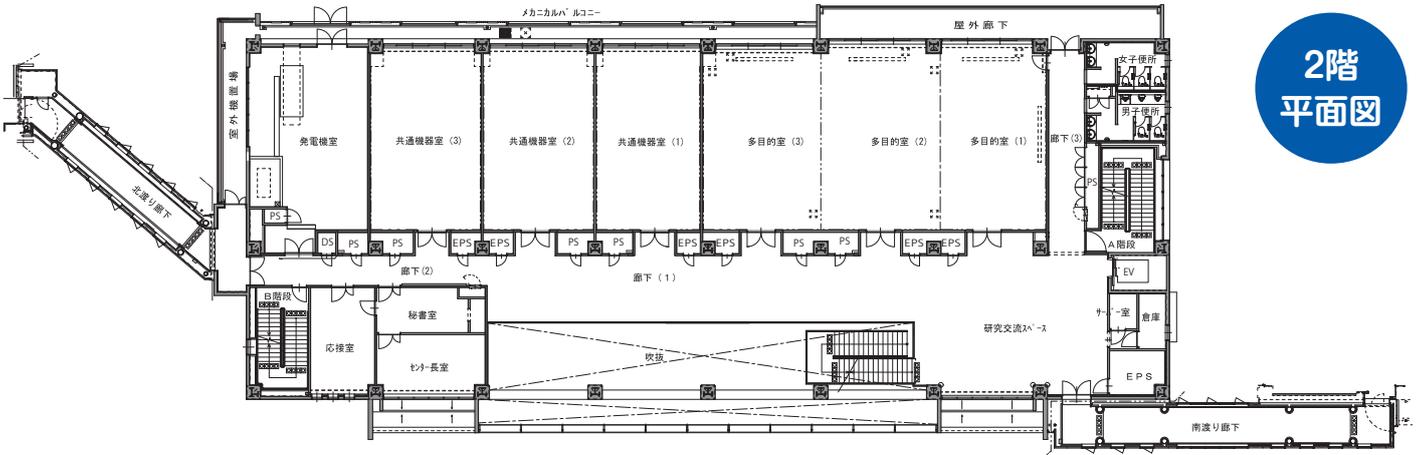
「徳島大学蔵本キャンパスは、医学系、歯学系、薬学系の各学部、大学院、および病院、さらに疾患酵素学研究センター、疾患プロテオゲノム研究センターが集積する国内でもユニークな生命科学の一大教育・研究拠点を形成している。この蔵本キャンパスに、このセンターを創設し、国内外の優秀な研究者を広く集めた学際・融合研究コンソーシアムを結成して、若手研究者の育成および医科学研究の発展に寄与する。」「センターは、設置理念に基づき、学際・融合領域の新たな分野の開拓および研究コミュニティの形成に戦略的に取り組み、世界トップレベルの研究成果の発信と優れた若手研究者を育成する世界的生命科学研究拠点の構築を目的とする。」

この理念と目的を達成するために、当面特任教授1名、テニユアトラック特任助教を2名配置する。さらに、センターは学生や博士研究員を含めて約136人の研究者が研究を行うことが可能であり、寄附部門や共同研究部門において、企業などから外部資金により研究を行うことができる。また、冷蔵庫などの基本的な研究設備が常備してあることから、研究室の基本的なセットアップなしに研究が行える点も特徴である。もちろん、先端的な設備も原則的に共同利用により使用できる。多くの研究者に利用していただき、世界的な成果を発信することがこのセンターのミッションである。なお、参考のために、センターの各階の配置図を示している。利用料金などの質問、コメントなどについては、医歯薬事務部センター事務室（isysoumuhosu1@tokushima-u.ac.jp）に問い合わせいただきたい。

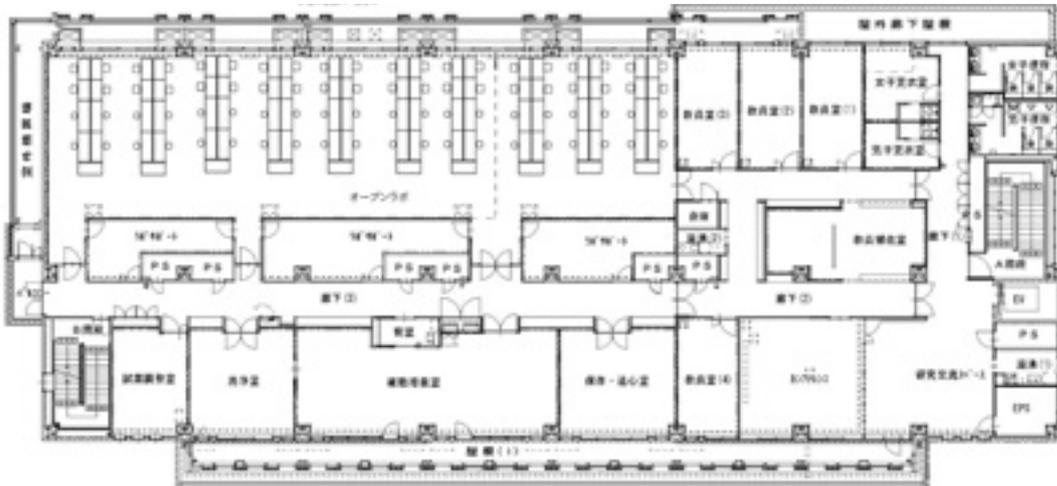
藤井節郎記念医科学センター平面図



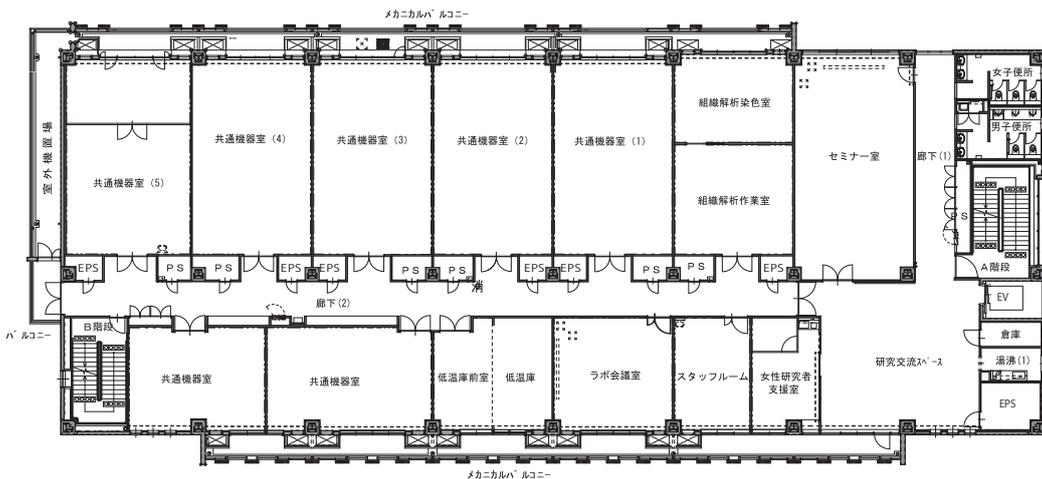
1階
平面図



2階
平面図



3・5階
平面図



4階
平面図

「人体解剖と骨のミュージアム」のリニューアルオープンと一般公開

ミュージアム運営責任者 北村 清一郎 (口腔顎顔面形態学分野教授)

学長ならびに学部長裁量経費の支援を受けてミュージアムを拡張・改装し(写真1)、5月2日にオープニングセレモニーを行いました(写真2)。一般公開は5月15日より開始され、現在までに160人余りの方が見学に訪れています。公開時間は毎週水曜日の13時から17時30分までで、見学には北村宛てファックスまたはメールによる予約が必要です。

ミュージアムには一般公開が可能な標本・模型が集められ、ヒトの骨標本17点、シリコン含浸内臓標本72点、その他の内臓標本など34点、また解剖模型57点、さらに動物の骨(頭骨が主)や歯など152点の計332点が展示されています。また、ミュージアム入口の横には、“人体標本の展示が日本解剖学会制定の「人体標本の展示に関するガイドライン」に則っている”旨の説明パネルが貼られ(写真2右側)、ミュージアム壁面には、解剖掛図などの他に、人体解剖や献体に関する説明パネルも掲示され、一般の方の理解を助けています。

展示物で一際目を引くのは、多数の動物の頭骨標本(写真3)です。これらを含む動物標本の多くは歯学部一教員が長年にわたり収集し、退職時に寄贈されたもので、現在では入手困難な標本も含まれています。最近では、化石人骨のレプリカ3種も寄贈されています。動物の頭骨標本は食性ごとに並べられ、食生活と顎や歯の形状との関連が理解できるよう配慮されています。また、リニューアルにあたり、シリコン含浸内臓標本(写真4)も新たに展示しました。この標本はヒト内臓の水分をシリコン樹脂で置き換えたもので、展示に際してホルマリン液に浸けておく必要がありません。標本は系統ごとに並べられ、解剖掛図を参考に見学できるようになっています。

一般公開を機会に、徳島大学歯学部保有学術資料管理運営規則、ならびに本ミュージアムの運営に関する細則が制定されました。保有学術資料には、ホルマリン液に浸けられた状態で解剖実習室に保管されている人体標本216点も含まれますが、これらは原則として医療系従事者・学生以外には公開していません。これらの標本は、歯学部生のみならず、学内外の医療系教育機関の標本見学実習や、様々な医療職種の後援講習会などに供され、年1回の2日間(原則として11月の第3週末)は、「人体解剖標本の展示」として医療系従事者・学生に広く公開されています。



写真1 ミュージアム内部



写真2 ミュージアム入口(オープニングセレモニーでの様子)



写真3 動物の頭骨標本



写真4 シリコン含浸内臓標本

徳島大学大塚講堂リニューアルオープン記念市民講座報告

薬理学分野 玉置俊晃

平成25年4月14日(日)に、徳島大学大塚講堂リニューアルオープン記念市民講座が開催された。大塚製薬株式会社と徳島大学の主催で「食卓にサイエンスを!!」をメインテーマに、毎日の生活に欠かすことが出来ない「食」が健康や生活習慣病に与える影響を生命科学的に追求した最新の研究成果を一般市民の皆様にはわかりやすい内容で伝える公開講座を開催した。

大塚講堂は昭和40年に、大塚グループ創始者大塚武三郎様のご篤志に基づき竣工され同年9月に落成式を挙行了した。その後、各種学会・研究会や数多くの徳島大学式典会場として幅広く利用されて、徳島における科学研究・教育・教養・文化の発信基地としての役割を担ってきた。平成3年には、ご寄付による改修工事等を経てその機能を充実させたが、建設後50年近くになり設備の更新が必要になり、再び大塚ホールディングス株式会社のご寄付を賜り、最新の音響・映像・空調装置を導入し、快適な客席を655席備えた近代的なホールとして平成25年4月1日にリニューアルオープンした。

今回の公開市民講座は、国立大学で唯一医学部に栄養学科を設置している徳島大学と「ニュートラシューティカルズ」を事業の中核にしている大塚製薬が主催し、ヒトの健康と「食」に関する講演を3名の講師にお願いした。徳島県民の「食」に関する関心は非常に高く、600名の募集人数を超える方々から応募があった。講演会当日も、満席の盛況で講演が行なわれた。

臨床栄養学分野の武田英二教授からは、「栄養学から見た素晴らしい食事」と題して、糖尿病やメタボリックシンドローム等の生活習慣病とともにサルコペニアややせ等の栄養不良にならない食事についての提案があった。1) エネルギー摂取量は、体重(kg) × (30-35) kcal/kgが基本です。メタボを心配して低エネルギーで脂質を摂取しないために、やせや栄養不良になっている高齢者を見かけます。2) 食事は一人で食べるのではなく、友人や家族とともに摂取してください。3) 糖尿病の克服については、必要なエネルギー摂取量を知ってください。そのうえで、豊富な野菜、麦や納豆、おくら、山芋などのネバネバ食品の活用も食後血糖値を抑えます。との内容がわかりやすく話された。

心臓血管病態医学分野の島袋充生特任教授からは「脂肪酸からみた心臓血管病：EPAが心臓病を防ぐしくみ」についての講演があった。修正可能な心臓血管病のリスクファクターには、喫煙、LDLコレステロール上昇、高血圧、HDLコレステロール低下、糖尿病、肥満症、運動不足などがある。さまざま疫学および臨床研究により、動物性脂肪の摂取が心臓病を増やすこと、逆に魚摂取が心臓血管病を防ぐことが示されている。それぞれ、飽和脂肪酸、多価不飽和脂肪酸(EPA、DHA)が主要な作用分子と想定されており、心臓血管病の発症要因として脂肪酸の種類が大切であることが示唆される。魚食摂取励行、動物性脂肪の過度の摂取を控えること、が心臓血管病の予防に有効と考えられる事などが紹介された。

武庫川女子大学国政健康開発研究所所長家森幸男教授からは、「大豆は世界を救う」と題して、講演をいただいた。家森先生が世界各国を訪問して多くの民族の食生活を調査・研究した長年のWHOでの研究成果を基に、長寿を楽しむための食についての家森先生の考えをご披露いただいた。コーカサス地方の人々の長寿を保つ野菜の多い食事、マサイ族の塩の少ない食事、オーストラリアの原住民であるアボリジニが短命になった原因の食生活など、数々の興味深いエピソードを交えながらとても楽しく解りやすく講演していただいた。

この公開講座は大盛況であり、リニューアルした大塚講堂が徳島地域社会の皆様への教養・文化の発信基地として活用されることが期待される。



武田英二 教授



島袋充生 特任教授



家森幸男 教授

人口の減少と大学改革について

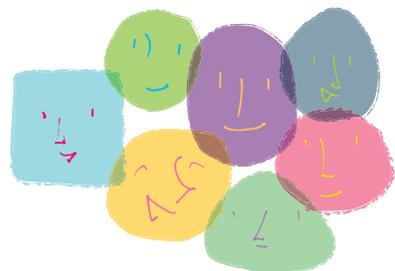
— 研究担当理事からの視点

理事（研究担当）野地澄晴

現在、18歳人口が減少し、今やピーク時（1966年）の249万人から約120万人となり、約半数になっている。大学・短期大学への進学率が54%に上昇しており、大学の数はそれでも増加し、大学全入時代を迎えようとしている。多くの大学の問題は、ここに帰着すると考えられる。たぶん、ヒトの遺伝子のSNPsがランダムに生じ、研究能力は入試の成績だけでなく多因子により決定されると考えると、各大学において研究能力を横軸にした学生数の分布は正規分布していると予想され、進学率が10%であった時代と比較すると、研究能力のある学生数は低下しているのは事実であろう。大学における多くの研究は、学生の力に依存している。実際、米国の大学などでは、研究者を支援するテクニシャンにより研究が支えられているが、日本では学生の研究力に頼っている。その学生の能力が低下すれば、当然研究のレベルも低下してくる。その傾向は近年顕著である。さらに、医学部においては、研修医制度が発足し、博士号取得希望者は減少し、専門医取得希望者が増加している。そのため、学生が大学院に進学しない傾向が続いている。地方大学における問題がさらにある。徳島県の人口は、約78万人、愛媛県の人口は142万人である。東京都の人口は1320万人であり、徳島の約17倍である。徳島県の人口は0.67%/年ほど減少している。つまり、現状を改革せず、今の人口動態を受け入れる限りは、能力のある学生数は減少し、日本の研究力が全体的にジリ貧になるのは、当然であり、さらに地方大学においてはこの傾向が顕著である。このような状況を脱却するために、効率的なイノベーション人材育成や理工系人材育成が急務となっている。しかし、一方で国は限られた予算を総ての国立大学法人に今までどおりに配分することには限界があると考えているようである。例えば、一法人複数大学（アンブレラ方式）なども提案されている。大学の数が多過ぎるという意見もあり、大学数を減らすことも考慮されているようである。

それでは、徳島大学がさらに発展するためにはどうすれば良いのであろうか？入学希望学生数増加対策として、長期的には県の人口を増加させる方法、つまり県の産業を発展させなければならない。現時点では、何をすれば良いのであろうか？そのヒントは、国際教養大学にあると私は思っている。

先日、秋田県にある公立大学法人国際教養大学を訪問した。秋田県の人口は105万人、秋田市は32万人である。この大学は秋田空港の近くにあり、周囲は主に森林等に囲まれている。2003年に閉校した米国ミネソタ州立大学機構秋田校の旧校舎等を利用して開学した。初代学長は中嶋嶺雄氏で、「英語をはじめとする外国語の卓越したコミュニケーション能力と豊かな教養、グローバルな専門知識を身に付けた実践力のある人材を養成し、国際社会と地域社会に貢献すること」を理念とした大学を設立した。講義は、1年生から総て英語で、TOEFL550点及びGPA2.5以上の条件を満たせば自分の好きな時期に留学できる。卒業要件には最低1年間の海外留学が含まれているので、留学しないとこの大学は卒業できない。この大学は最近、非常に人気が高く、多くの優秀な高校生が入学している。この特徴的な大学は、地方大学がめざす大学の象徴ではないかと思っている。つまり、「徳島大学でないと学べない特徴的で高度な教育や研究を行う」ことを先進的に実現する必要がある。教育・研究をグローバル化し、一方でローカルに生きる力も備えている人材を育成できるような大学改革が必要である。そのように「大学を改革しないと、徳島大学の存在感が希薄になる」という危機感を持つことが改革推進においてまず重要である。



疾患治療栄養学分野

特任教授 濱田 康 弘

近年、栄養サポートチーム（Nutrition Support Team: NST）に代表されるように医療現場で医療の根本のひとつである栄養管理の重要性が認識されるようになり、基礎および臨床医学の飛躍的な発展もあり、医学に基盤を置く栄養学の充実が求められています。そこで、国立大学で唯一医学部に栄養学科をもつ徳島大学では大学病院を有する優位性を生かし、臨床栄養学教育とくにベッドサイド教育の強化を目的に病院栄養部と共同で新しい教育研究プログラムを支援する体制を構築するため、学科創設50周年を契機に従来の7分野に加え疾患治療栄養学分野が臨床系の新分

野として設立されました。

疾患治療栄養学分野は、関連する他の講座や学部と連携し、大学病院と密接に連携した臨床栄養学を教育するシステムを確立し、実践的な臨床栄養の基礎を修得し高度化する医療に適応できる優れた管理栄養士養成を行うことを目指します。また、大学院では、臨床経験を持ち、実地臨床における問題意識を強く持つ社会人の受け入れも強化し、臨床のみならず研究面においても指導的立場になる栄養学博士の育成を行い臨床栄養学領域における教育研究拠点の形成に寄与したいと考えています。



写真1 栄養サポートチーム（NST）カンファレンス



写真2 NST回診

先端運動障害治療学分野

特任教授 後藤 恵

先端運動障害治療学分野は、パーキンソン病、ジストニア、振戦などの運動障害の治療、研究を目的に平成25年4月1日設置されました。英名は“Department of Motor Neuroscience and Neurotherapeutics”で、上述の原因不明の運動障害疾患の基礎的研究から内科学的・外科学的臨床治療までを包括して行い、徳島から世界へ医学情報を発信し、多くの病に悩まされる方々の希望となることを目指しております。基礎研究においては、培養細胞、遺伝性ジストニアや、パーキンソン病モデルマウス・ラットなどを用い、難病の原因の究明とその治療法の開発に力を注いでおります。臨床においては上述の不随意運動患者に対し、内服加療・ボツリヌス毒素治療・脳深部刺激療法を中心とし

た手術加療を行い、より良い治療の実践や新たなエビデンス構築へ貢献できればと考えております。



● 医療教育開発センターニュース

～取組紹介～

● 頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム

『疾患ニュートリウムを基盤とした加齢による循環器障害研究の国際ネットワーク構築』（平成23～25年度）が最終年度を迎えました。7名の若手研究員が研究活動をしています。

＜留学終了＞

● ミュンヘン工科大学（ドイツ）

● NIEHS/NIH（米国）

＜留学中＞

● ポストン大学（米国）

● レディング大学（英国）

● ロチェスター大学（米国）

● クリーブランドクリニック（米国）

● エール大学、オハイオ州立大学（米国）



● 組織横断型教育クラスターにおける大学院教育支援

平成21年度より教育クラスターによる大学院教育支援が実施されています。

＜平成24年度実績＞

● クラスターコアセミナー

6クラスター合わせて35回開講。

● ミニリトリート



クラスター	日 時	参加人数				
		教員	院生	学部生	講師	計
感染・免疫	H24.11.21-22	17	11	7	2	37
心・血管	H25.1.4-5	26	9	3	1	39
肥満・糖尿病	H25.1.18	13	23	5	2	43
ストレスと栄養	H25.2.1-2	17	16	1	1	35
脳科学	H25.2.16-17	12	9	3	1	25
合 計		85	68	19	7	179

● 高機能シミュレーターや遠隔教育システムを利用した学習への取り組み

昨年度購入した高機能シミュレーターや遠隔教育システムを利用した講習会が、定期的に開催されています。



血管インターベンションシミュレーター MENTICE VISTを利用した脳外科による実習風景。



医学科 5～6年次臨床実習で、遠隔教育システムを利用して徳島県立三好病院手術室と双方向で通信しながら術式を学習。

● フィンランド ヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学学生スキルス・ラボ実習

5月14日（火）に本学保健学科と部局間交流協定を締結しているメトロポリア応用科学大学ヘルス・アンド・ナーシング学部の留学生1名が本学看護学専攻4年生9名と当センター作成の英語版テキストを利用して、スキルス・ラボで採血、吸引、手洗い、導尿実習を行いました。本学看護

学生とお互いにコミュニケーションをとりながら実習を進めることで、国際交流の一助となりました。



● 学校教員対象第1回救急蘇生講習会

6月13日（木）に徳島市立加茂名小学校の教諭30名を対象にBLS+AED講習会を行いました。プール開きの直前であったため、溺水者の救命の講習をしました。講義とタスクトレーニングの後、代表者3名に別室でシナリオベースのシミュレーションを行い、ビデオフィードバックを行いました。この講習会が、今後のスキルス・ラボと地域を繋げるきっかけになればと期待します。



● 徳島県下高校生医学体験実習

8月8日（木）、9日（金）に徳島県主催、当センター協力で高校生医学体験実習を開催しました。この取組は、徳島県の医師確保対策の一環として、将来医学部への進学を志望されている高校生を対象に模擬体験を通じて医学への関心を高めてもらう目的で毎年開催しております。今回も2日間で117名の高校生が救急蘇生・聴診・縫合・採血・衛生的手洗いの実習を行いました。これまでの参加者のうち15%が徳島大学医学部医学科に入学し、約80%が医療系に進学しています。優れた医療人を目指すキャリア形成の第一歩となることを期待します。



～これからの主な取組～

● 第7回チーム医療入門～蔵本地区1年生合同WS

日時：平成25年9月30日（月）13:00～17:00
場所：蔵本キャンパス（大塚講堂、WS会場）
講師：安井清孝先生

（福島県立医科大学災害医療総合学習センター教員）

演題：「福島の現場から」

● 第5回医療教育講演会

日時：平成25年11月6日（水）18:00～19:30
場所：大塚講堂
講師：熊坂義裕先生（盛岡大学栄養科学部教授）

演題：東日本大震災から2年半、地域・生活の復興とは

● 第3回How to医療コミュニケーション教育

～医歯薬学教育アウトカムに応じた模擬患者育成～

日時：平成25年11月16日（土）9:00～12:00
場所：医学部第三・第四会議室
講師：藤崎和彦先生

（岐阜大学医学教育開発研究センター教授）

2006年、山中伸弥京大教授がiPS細胞の樹立に成功したのを皮切りに、幹細胞研究にiPS細胞が加わりました。さらに、2012年のノーベル賞受賞によって、一気に研究にアクセラが入った感があります。また、幹細胞を用いた研究領域も、幹細胞の基礎研究のみならず、再生医療の実現に向けた臨床研究も開始されることが決まるなどその範囲も広がりを持ってきました。現在では、幹細胞を用いた再生医療が近未来の医療の姿として、空想ではなく、日常の医療としてイメージできるようになってきた状況です。

この度、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部では、「再生医学研究の現状と臨床応用への課題」というテーマで、平成25年11月12日（火）、長井記念ホールにおいて、平成25年度HBS公開シンポジウムを開催することになりました。シンポジウムでは学内から再生医学研究者（伊藤孝司教授、大政健史教授、先山正二准教授、三好圭子講師）の4氏にその研究の最新状況を報告して頂くとともに、京都大学iPS細胞研究所から副所長の中畑龍俊教授に御來徳頂き、「iPS細胞を用いた今後の医療」という演題で特別講演を行って頂く予定になっております。徳島大学の再生医学研究の取り組みとともに、国内外の最新の取り組みを議論していただきます。幹細胞研究はもとより、創薬や再生医療研究に携わる方々にも、有用な情報としてご活用いただける内容です。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

HBS市民公開講座開催報告

食品機能学分野 寺尾 純二

■ 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部、日本栄養食糧学会中国・四国支部共催市民講座「温故知新の栄養学一欠乏・過剰、そして調和」を終了して

徳島大学医学部栄養学科は昭和39年に設置され、50周年を迎えようとしています。この間、栄養学科は我が国の栄養学研究教育の基盤形成に邁進してきました。翻って我が国における栄養問題は、戦後の栄養不足に始まり、高度経済成長に伴う食の欧米化が進行し、現在では飽食の時代を迎えました。その一方で、栄養学研究は生命科学の飛躍的な発展と連動して分子レベルから個体レベルまで大きく変貌しつつあります。そして、ヒトの健康を支える栄養学の発展が益々期待されます。そこで、平成25年8月30日、リニューアルされた大塚講堂で平成25年度HBS研究部市民公開講座「温故知新の栄養学一欠乏・過剰、そして調和」を開催しました。栄養学科創設50周年記念事業委員会の協賛をいただきましたので、栄養学科ゆかりの方々に講演をお願いし、栄養学科が辿った道のりと我が国の栄養学の発展を省みる内容にしました。さらに、日本栄養食糧学会中国・四国支部との共催にいたしました。講座には各世代の栄養学科卒業生や学部生・大学院生が多数集まり、市民の方々と合わせて参加者は総数250名に達しました。

前半の講演では、栄養学科38期生の安井苑子先生（疾患治療栄養学）がベッドサイドにおける栄養学の重要性と今後の展開を自らの経験を踏まえて語られました。次に20期生の黒川有美子先生（高松赤十字病院）がエピソードを交えて、病院現場で管理栄養士として活躍されてきた道のりを講演されました。後半は、6期生の木本真順美先生（岡山県立大学）がライフワークであるアミノ酸代謝の研究を辿り、臨床へ結ぶ基礎栄養学の大切さをアピールされました。最後に旧栄養生理学講座（現生体栄養学分野）教授の岸恭一先生（徳島大学名誉教授）が、旧石器時代から現代に至るヒトの進化が孕む栄養問題をタンパク質栄養の観点から提起されました。すべての講演は大変印象的であり、特にこれから栄養学をめざす若い学生には示唆に富むものであったと思います。翌日8月31日に開催された栄養学科創設50周年記念行事の幕開けにもなり、有意義な一日でした。



学会情報

- 第29回日本ストレス学会学術総会 会長：六反一仁
開催日：平成25年11月8日（金）～9日（土）
会場：徳島大学大塚講堂
問合せ先：ストレス制御医学分野
TEL：088-633-9004 FAX：088-633-9008
e-mail:kanri@stress29.com
- 第37回日本心身医学会 中国・四国地方会 会長：住谷さつき
開催日：平成25年11月9日（土）
会場：徳島大学蔵本キャンパス内 青藍会館
問合せ先：精神医学分野
TEL：088-633-7130 FAX：088-633-7131
- 第30回中国四国小児腎臓病学会 会長：香美祥二
開催日：平成25年11月17日（日）
会場：徳島シビックセンター 市民ギャラリー 4階ホール
問合せ先：小児医学分野
TEL：088-633-7135 FAX：088-631-8697
- 第23回アンチセンスシンポジウム 会長：南川典昭
開催日：平成25年11月28日（木）～29日（金）
会場：徳島大学大塚講堂
問合せ先：委員長 南川 典昭
TEL：088-633-7288 FAX：088-633-7288
- 第31回日本森田療法学会 会長：友竹正人
開催日：平成25年11月28日（木）～30日（土）
会場：あわぎんホール（徳島県郷土文化会館）
問合せ先：精神医学分野
TEL：088-633-7130 FAX：088-633-7131
- 日本耳鼻咽喉科学会第39回四国四県地方会 会長：武田憲昭
開催日：平成25年11月30日（土）～12月1日（日）
会場：徳島大学大塚講堂大ホール
問合せ先：耳鼻咽喉科学分野
TEL：088-633-7169 FAX：088-633-7170
- 第76回（社）日本脳神経外科学会中国四国支部学術集会 会長：永廣信治
開催日：平成25年12月7日（土）
会場：徳島大学大塚講堂
問合せ先：脳神経外科学
TEL：088-633-7149 FAX：088-632-9464
- 第13回日本医療情報学会中国四国支部セミナー 会長：森口博基
開催日：平成25年12月14日（土）（予定）
会場：徳島大学病院 日亜メデイカルホール
問合せ先：医療情報学分野
TEL：088-633-9178
- 第30回 日本毒性病理学会総会及び学術集会 会長：泉 啓介
開催日：平成26年1月30日（木）・31日（金）
会場：あわぎんホール
問合せ先：環境病理学分野 TEL：088-633-7066
- 第32回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会 会長：武田憲昭
開催日：平成26年2月6日（木）～8日（土）
会場：ホテルクレメント徳島
問合せ先：耳鼻咽喉科学分野
TEL：088-633-7169 FAX：088-633-7170
- H25年度 大学病院情報マネジメント部門連絡会議 会長：安井 夏生 病院長
開催日：平成26年2月12日（水）・13日（木）・14日（金）
会場：ホテルクレメント徳島
問合せ先：TEL：088-633-7458
- 第53回日本血液学会中国四国地方会 会長：安倍正博
開催日：平成26年3月1日（土）
会場：徳島大学大塚講堂
問合せ先：生体情報内科学分野
TEL：088-633-7120 FAX：088-633-7121
- 日本耳鼻咽喉科学会第71回徳島県地方会 会長：武田憲昭
開催日：平成26年3月23日（日）
会場：徳島大学青藍会館
問合せ先：耳鼻咽喉科学分野
TEL：088-633-7169 FAX：088-633-7170

新任教授ご挨拶

社会環境衛生学講座



小児歯科学分野 教授 岩本 勉
平成25年4月1日付けで小児歯科学分野教授に就任致しました岩本勉と申します。私は平成11年に長崎大学歯学部を卒業した後、同大学大学院において、破骨細胞の分化に関わるスフィンゴ糖脂質の役割について研究を行いました。大学院修了後、同大学院医歯薬学総合研究科口腔顎顔面部病態・外科制御学分野、米国国立衛生研究所（NIDCR山田吉彦博士研究室）、九州大学病院、東北大学病院にて、歯の発生に関わる遺伝子の網羅的解析と機能遺伝子の同定を進めております。今後もこれまでの研究を発展させ、臨床と直結した基礎研究を進めていきたいと考えております。今後ともご指導、ご鞭撻の程、何卒よろしくごお願い申し上げます。

資源分子探索学講座



生薬学分野 教授 柏田 良樹
平成25年4月1日付けで生薬学分野を担当させていただくことになりました。私は、本学大学院薬学研究科を修了後、九州大学大学院に進学、中途退学して助手、その後米国ノースカロライナ大学薬学部で研究助手、研究助教授を経験し、新潟薬科大学助教授を経て、平成18年に母校の生薬学分野の助教授に就任し、現在に至っています。本学在学時代から一貫して生薬学・天然物化学分野で、植物資源の生物活性成分の探索とそれを素材とした創薬学的研究を行ってきました。生薬学は薬学の中で最も古くからある創薬学的研究領域分野のひとつであり、また地域社会からのニーズも多い分野であると認識しています。今後も生薬・天然物化学を基盤とした教育研究に尽力していきたいと考えておりますので、皆様のご指導ご鞭撻のほどをよろしくごお願い申し上げます。

医療栄養科学講座



疾患治療栄養学分野 特任教授 濱田 康弘
平成25年4月1日付けで、医療栄養科学講座疾患治療栄養学分野特任教授に就任いたしました。また、大学病院栄養部と密接に連携して実践的な臨床栄養を推進していくため、大学病院栄養部長も兼任させていただいております。近年、栄養サポートチーム（Nutrition Support Team: NST）に代表されるように医療現場で医療の根本のひとつである栄養管理の重要性が認識されるようになっており、関連する他の講座や学部とも連携し、大学病院と密接に連携した医科栄養学を教育するシステムを確立し、実践的な臨床栄養の基礎を修得し高度化する医療に適応できる優れた管理栄養士養成を行うことを目指したいと思っております。今後ともご指導、ご支援賜りますようよろしくごお願い申し上げます。

寄附講座



先端運動障害治療学分野 特任教授 後藤 恵
平成25年4月1日付けで、ヘルスバイオサイエンス研究部先端運動障害治療学分野に就任しました後藤恵（さとし）と申します。本分野は、パーキンソン病、ジストニア、また脳卒中後の痙縮などの運動異常症（movement disorders）に対する新しい治療法の開発を目的として開設されました。運動異常症の治療を前提としたトランスレーショナルニューロサイエンスを主題に、神経機能再生医療と新薬開発に結びつくテーマについて研究および診療を行いたいと考えています。今後とも御支援よろしくごお願い申し上げます。

顎口腔再建医学講座



生体材料工学分野 教授 濱田 賢一
平成25年5月1日付で、生体材料工学分野教授に昇任しました。これまで行った研究では、東京大学工学部、および同大学院を通しては航空宇宙用複合材料を、その後博士研究員として赴任したUniversity of Washingtonではスマート材料を対象としました。平成9年10月に徳島大学歯学部歯科理工学講座に赴任後は、臨床応用を目指した医用生体材料の研究開発に取り組んでいます。材料の開発においてはニーズとシーズを上手に結びつける必要があります。臨床に携わる先生方から様々なニーズをご提案頂くことが新たな開発への第一歩になります。今後ともご指導の程、宜しくごお願い申し上げます。

薬資源科学講座



有機合成薬学分野 教授 難波 康祐
平成25年5月1日付けで有機合成薬学分野教授に就任いたしました難波康祐と申します。私は平成8年に大阪市立大学理学部化学科を卒業後、平成13年に同大学大学院後期博士課程を修了致しました。学位取得後すぐに渡米し、コロラド州立大学で2年、ハーバード大学で2年半の博士研究員を務めました。帰国後は、財団法人サントリー生物有機科学研究所の研究員を1年、徳島文理大学薬学部の助教を1年半、北海道大学大学院理学研究院の講師・准教授を5年務め現在に至っています。私はこれまで一貫して有機低分子化合物の設計・合成研究に取り組んで来ました。有用な有機低分子化合物や分子プローブの創製・供給を通じて本学HBS研究部に貢献できるよう努力いたす所存です。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

退職教授一覧（医学系）

- | | | |
|------------------------|----------|----|
| ・ 大下修造 教授(麻酔・疼痛治療医学分野) | H25.6.30 | 退職 |
| ・ 中屋 豊 教授(代謝栄養学分野) | H25.9.30 | 退職 |

学会賞等受賞者紹介

Globus New Investigator Award in Stroke

多田 恵曜 脳神経外科学分野・助教



受賞年月日：
2013年2月7日
受賞内容：
Estrogen protects against aneurysmal rupture through estrogen receptor-beta in ovariectomized mice

武田薬品工業研究企画賞

重永 章 機能分子合成薬学分野・助教



受賞年月日：
2013年2月19日
受賞内容：
生細胞内での標的タンパク質選択的ラベル化を可能とするin cellラベル化試薬の開発

2013 RISP International Workshop on Nonlinear Circuits, Communications and Signal Processing NCSPT13 Student Paper Award

山口 雄作 医用画像機器工学分野・大学院生



受賞年月日：
2013年3月7日
受賞内容：
Extended Continuous-Time Image Reconstruction System for Binary and Continuous Tomography

第86回日本細菌学会総会優秀発表賞

Asikin Nur 口腔微生物学分野・大学院生



受賞年月日：
2013年3月20日
受賞内容：
The role of extracellular DNA in *Pseudomonas aeruginosa* and *Streptococcus intermedius* infection

第83回日本衛生学会学術総会若手優秀演題賞

釜野 桜子 予防医学分野・助教



受賞年月日：
2013年3月26日
受賞内容：
Near MC 4 R遺伝子多型が日本人の肥満指標および中性脂肪値に及ぼす影響

日本薬学会第133年会優秀発表賞

栗本慎一郎 生薬学分野・大学院生



受賞年月日：
2013年3月30日
受賞内容：
シソ科植物 *Scutellaria coleifolia* 地上部の成分研究 (1)

日本薬学会第133年会優秀発表賞

北風 圭介 創薬生命工学分野・大学院生



受賞年月日：
2013年3月30日
受賞内容：
酵素の分子構造改良に基づくTay-Sachs病治療薬の開発

日本薬学会第133年会優秀発表賞

樋口 陽介 生物有機化学分野・大学院生



受賞年月日：
2013年3月30日
受賞内容：
ImO^{III}:NaN^{III}塩基対を両末端部に持つ環状DNAの合成研究

第16回日本臨床分子医学会学会賞

佐田 政隆 循環器内科学分野・教授



受賞年月日：
2013年4月13日
受賞内容：
心血管病の病態生理の解明と治療法の開発

日本小児科学会学術研究賞

早淵 康信 小児医学分野・准教授



受賞年月日：
2013年4月20日
受賞内容：
肺高血圧症の病態解明と新規治療法の開発

Best of posters AUA 2013 ANNUAL MEETING

布川 朋也 泌尿器科学分野・助教



受賞年月日：
2013年5月5日
受賞内容：
DDX31 regulates p53 tumore suppressor activity through its interaction with NPM 1 in renal cell carcinomas

第102回日本循環器学会中国・四国合同地方会 コメディカル部門 最優秀賞

平田有紀奈 循環器内科学分野・大学院生



受賞年月日：
2013年5月11日
受賞内容：
冠動脈狭窄と関連する脂肪組織はどれか？～超音波検査を用いた検討～

European Histamine Research Society 42nd Annual Meeting Young Investigator Award

中野 友寛 分子情報薬理学分野・大学院生



受賞年月日：
2013年5月11日
受賞内容：
QUERCEIN INHIBITS TRANSCRIPTIONAL UP-REGULATION OF HISTAMINE H1 RECEPTOR VIA SUPPRESSING PROTEIN KINASE C-D/EXTRACELLULAR SIGNAL-REGULATED KINASE/POLY(ADP-RIBOSE) POLYMERASE-1 SIGNALING PATHWAY IN HELA CELLS

平成24年度社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞

後藤 崇晴 口腔顎顔面補綴学分野・助教



受賞年月日：
2013年5月17日
受賞内容：
Main occluding area in partially edentulous patients: changes before and after implant treatment

日本膜学会第35年会学生ポスター賞

水口 智晴 製剤設計薬学分野・大学院生



受賞年月日：
2013年5月21日
受賞内容：
脂質膜環境下でのアポA-アミロイド線維形成

内田論文賞 (医用画像情報学会)

林 裕晃 医用理工学分野・助教 (左)



画像情報医学分野・准教授 (右)
受賞年月日：
2013年6月1日
受賞内容：
輝尽性蛍光体プレートを用いて取得したX線画像上の黒点発生の解明に向けたモンテカルロシミュレーション

Young Scientist Award (11th World Congress of Biological Psychiatry)

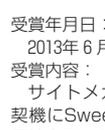
沼田 周助 精神医学分野・講師



受賞年月日：
2013年6月24日
受賞内容：
統合失調症における血漿ホモシステイン濃度の検討

日本消化器病学会 四国支部研修医奨励賞

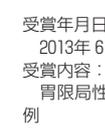
武原 正典 消化器内科学分野・大学院生



受賞年月日：
2013年6月29日
受賞内容：
サイトメガロウイルス腸炎の合併を契機にSweet病の合併発症を認めた潰瘍性大腸炎の1例

日本消化器内視鏡学会研修医奨励賞、日本消化器内視鏡学会四国支部研修医優秀演題

村山 典聡 消化器内科学分野・大学院生



受賞年月日：
2013年6月29日
受賞内容：
胃限局性AL型アミロイドーシスの1例

日本歯科医学教育学会 優秀論文賞

松香 芳三 咬合管理学分野・教授



受賞年月日：
2013年7月12日
受賞内容：
A problem-based learning tutorial on elder inpatients in a nursing home in Japan

編集後記

徳島大学に大学院HBS研究部が発足して9年目に入り、「HBS研究部だより」も今回で19号を数える。本年度はHBS研究部長の交代があり、苜原研究部長に巻頭言をお願いした。改めて感謝したい。また、本号では「藤井節郎記念医学科学センター」、「人体解剖と骨のミュージアム」、および「大塚講堂リニューアル」の3つの特集を組んだ。担当して頂いた野地研究担当理事、北村教授および玉置教授に感謝する。HBS研究部では前述のようにハード面の整備がなされてきたが、人材を中心としたソフト面での充実をはかる必要がある。幸いに若手研究者の学会賞等受賞者の数も増え、研究部において研究が発展しているのが実感できる。これからも若手研究者を中心とした研究成果が上がることを期待したい。(羽地達次)

HBS研究部だより 第19号

発行日：平成25年10月1日

発行：徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

編集：研究部広報委員会

広報委員：羽地達次(委員長)、泉 啓介、森口博基、酒井 徹、大塚秀樹、尾崎和美、山内あい子、南川典昭、赤池雅史、米原壽男

http://www.tokushima-u.ac.jp/hbs/

問合先：医歯薬事務部総務課総務係

E-mail：isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp